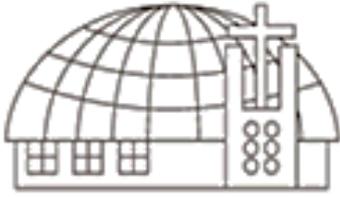


8月報(2022年) 萌 カトリック福山教会



福山教会活動テーマ：

「喜びをもっていのちをもたらす福音を社会に伝えよう」

〒720-0808 福山市昭和町 7-26

☎【084】923-0614 FAX【084】923-0615

e-mail : fuku-ch@ktd.biglobe.ne.jp

【聖母の被昇天によせて】

猪口大記神父



神学生の頃、座学の部分に関する最終試験のようなものがありました。その1つに筆記試験がありました。様々な神学の分野から40問ほど出題され、くじ引きで当たった問いについて数時間かけて論述するものです。私が引いたのはマリア論で聖マリアの様々な称号について解説せよというもので、特にヨハネ・パウロ2世以後の神学にも触れよというものでした。時に神と人との「唯一の仲介者 (Mediator)」であるイエス・キリストのごとく、「仲介者 (Mediatrice)」と言われ、「主の昇天」に対し「聖母の被昇天」と言われることから、何かその関係について疑問に思うことがあるかも知れません。そこで、今日は聖マリアについて少し考えてみましょう。

1, 聖マリアと女性性

さて、「聖母の被昇天」といわれますが、「マリアの被昇天」といった方がよいのではないかと思うことが度々あります。聖マリアについては、歴史的に西欧では「Madonna (伊:我が婦人)」や「Notre Dame (仏:我等が婦人)」「Our Lady (英:我等が婦人)」など、女性性を強く伴う表現が用いられて来ました。日本語の「聖母」はどちらかというとも女性性を表現し「神の母」の印象が強いためあまり問題ではないのかも知れませんが、やはり聖マリアを「女性の模範」と受け止めてしまう傾向があるように思います。実際、小教区に「マリア会」という女性の会が存在し、男性は「ヨセフ会」といった例をみたことがないのでしょうか？ベタニアのマリアやアリマタヤのヨセフに因んだ性格の会なのであれば、そのような名づけも理解されるのですが、「女性だからマリア会、男性だからヨセフ会」なのであれば、どこか女性性の範型のように聖マリアを理解し、そこに閉じ込めてしまっているからではないかと思うことがあります。

2, 聖マリアと人間性・教会の範型

当たり前ですが聖マリアは、どこまでも人間です。神であり人である唯一の仲介者イエス・キリストとは異なります。そこを間違えるカトリック信者はいないと思いますが、聖マリアに関連する秘儀を祝うわたしたちを見て誤解する人がいるというのも事実ではあります。反対に、男神に対する女神のようなものではないと理解しつつ、「神であり人である男性=イエス」に

対し「どこまでも人間である女性＝マリア」と、さながら教義に構造的な「男尊女卑」の傾向があると誤解する人もいます。

しかし本来どこまでも人間である聖マリアであるからこそ、わたしたちはそこに信仰を生きる人間の姿を見出します。聖マリアに関する称号や教義について、ともすると特別に恵まれた女性としてのみ捉えてしまうかも知れませんが、神の救いの計画に主体的に「はい」と応じ、神である方をその身に宿し、この世界に救い主を生んで示し、人々のために執り成すイエスに取り次ぎ、その地上の生涯の終わりにはその全てが神に受け取られた人間です。そして、わたしたちは聖マリアのような特別な形ではありませんが、基本的には同じ恵みに招かれています。

「キリストのからだ」である教会は神であり人である方のごとく神と人とが接する場ですけれども、人の集いとしてのみ見るならば、それは洗礼によって罪から清められて生まれた人々が、聖霊によって御子を宿し、この時代に聖体の秘跡と行いによって人々にキリストを示し、人々のために御子を通じて神に祈り、やがて救いの完成までこの地上を旅する者です。聖マリアは女性も男性も関係なく信者の模範であり、その集いとしての教会の範型なのです。

3, 東西の伝統に見られる聖マリアの地上の生の終わり

ところで聖画像をみると、「生神女就眠図」のような聖マリアについてその死の時を描いたものがあるのに気づかされます。それを見て何か「東方では聖マリアの被昇天を認めず、反対に西方では聖マリアの死を認めていない」などと早合点することもあるようです。しかし実は東方のイコンばかりではなく、西方にも同様の図像があります。実際、教皇四大バジリカの一つであるサンタ・マリア・マッジョーレにも、聖マリアの生涯の終わりを描いたモザイクがあるくらいです。そしてそれらは、聖マリアの地上の生涯の終わりから、天上での命への移り変わりという一連の「遷化(トランジトゥス)」の流れの中に位置づけられています。

既に東方では7世紀の初めには8月15日に「アナパウシス」または「コイメーシス」とギリシャ語で云うそうですが、聖マリアの生涯の終わりを記念していたことが分かっています。その後、しばらくするとそれらは被昇天を意味する「アナプレーシス」と呼ばれるようになって行きました。時を概ね同じくして西方でも眠りを意味する「ドルミツィオ」と呼んで聖マリアの地上の生活の終わりを記念し、やがて東方に比べ少し時間があつたようですが、8世紀から9世紀には被昇天を意味する「アッスンプツィオ」と言われるようになりました。つまり、「地上の生の終わり」と「被昇天」は本来矛盾したり対立したりするものではなく、聖マリアが天上で命と栄光に与る一連の出来事であり、伝統的に教会の信仰において保持されてきたことができます。

4, 被昇天の教義の決定

被昇天が教義として明確に定義されたのは意外と新しく、教皇ピオ12世によって1950年11月1日に「マリアがその地上の生活を終わった後、肉身と霊魂とともに天の栄光にあげられたことは、神によって啓示された真理であると宣言し、布



告し、定義する」(DH. 3903.)と定義されました。こういう風に教皇が教義宣言することを「エクス・カテドラ」と言います。

さて、用語的に「肉体と靈魂」という伝統的な表現を用いてはいます。ただこれはマリアの全人格に対し救いが与えられたことをよく表現し、「地上の生活を終わった後」という言葉は正教会でよくみられる「生神女就寝図」に描かれる光景とも矛盾しない被昇天のあり方を示すという意味で、とても東西の伝統の調和を踏まえた現代的表現でもあると言えるでしょう。

教義について定義する文章である以上、その形式や読み方というものがあります。それを忘れると一見時代遅れの権威主義的な主張にも見えます。実際、当時東方の正教会からは、伝統的に聖母の被昇天について認められてきたにも関わらず、改めて西方教会のローマ司教である教皇が全世界に向けて教義として宣言することについて反発する向きがあったようですし、プロテスタント諸派からは聖書に基づかない主張を行っているとは批判もされたようです。

誤解されることもありますが、教義について正式に定義することは、都合の良いように教義を変更し決定することではありません。それまで受け継がれてきた信仰を、改めて表現しなおすことと言ってよいでしょう。本質において変わらずとも、その表現においては変わりうるのです。むしろ、その教えを宣べ伝えるに際して相手に分かる言語を用いなければならないように、新たに表現しなおしていく努力は怠るべきではないでしょう。

5、「死」や「からだ」をどう捉えるか

さてピオ12世が被昇天を教義と定義した文章の中に「マリアがその地上の生活を終わった後」とは書かれていますが、肉体的な意味での死を経験したか否かについては明言されていません。死を経験せず天上にあげられたと考える人々に配慮したそうですが、死の瞬間や被昇天の瞬間などを細かく定義することは困難でしょうし、信仰の上ではあまり意味がないことでしょう。いずれの立場であれ、被昇天とは地上の生活の終わりを意味するからです。教義について考えたり話したりする時には、教義が定義されるにあたって、特に明言されていない部分がたくさんあることも理解しておく必要があります。

また主の昇天についても言えることですが、被昇天などの「天」や「上げられる」という表現に空間的な表象が用いられていても、別に「上空」を意味しているのではないということです。むしろ空間的な表象を用いて、神の命に一致することを指しています。教義が定義される時には、他の教義に用いられる聖書や伝統にしたがった用語や表現を用いることがよくあります。定義されたのは1950年ではありますが、その表現の背後には伝統的な用語法があります。現代の感覚からして、聖マリアの被昇天の教義について違和感を覚えることがあるとすれば、おそらくそれは表現に由来するものです。



聖マリアの被昇天について「肉身と靈魂とともに天の栄光にあげられた」と定義されているのですが、これも用語上の歴史的な背景を持ちます。例えば聖体の秘跡を考えてみていただくと分かりやすいかと思いますが、私たちは「キリストのからだ」である聖体の秘跡を受けますけれども、それは「愛の秘跡」でもあります。私たちが聖体を受ける時、「キリストの肉身に与って、その愛に与らない」などということはないと思います。人間を精神と肉に分離して、どちらかが実体であるかのように考えることは、実は少し無理があるのです。

「肉体」と「靈魂」を対立する概念のように捉えて人間を二分する考え方を「霊肉二元論」などと言いますが、古代のギリシャ哲学などに顕著で、その影響を受けたヘレニズム社会の思想的枠組みをなしていました。初期の教会はそのヘレニズム社会で宣教するに際し、人々との対話のためにギリシャ哲学由来の概念を用いて語るようにもなりました。ヘレニズム文化圏では靈魂や精神の優越性が強く主張され、肉体や物質は時に害悪であるかのように軽視される傾向があったことは、例えばアレオパゴスで使徒パウロが語ることが一笑に付された使徒言行録の記事などからも分かります。教会は人間を霊肉二元論的に捉えるのではなく、統合的に捉えていたわけですが、それでも二元的に捉える人々と対話するに際しては、「靈魂も肉体も」と語るしかないわけでした。信仰宣言においてもわざわざ「からだの復活」と表明することで、人間を靈魂だけで捉えてはいないことを示しています。

この流れを受けて、伝統的な終末論では人間が死後、清めの必要がない場合にはその靈魂は直ちに神の命と救いに与るが、肉体は終わりの時に復活し「霊の体」(I コリント 15:44)へと変えられるといます。そしてキリストは他の死者に先立って復活した「初穂」(I コリント 15:20 参照)と言われます。この伝統的な形式に聖マリアの被昇天の教義を位置づけると、聖マリアは終末の時を待たず、特別な恵みによってキリストのような在り方で復活に与っていると表明されていることとなります。

ただ、少し現代的に「からだ」を単純に物質的な意味での肉体としてだけではなく、人が世界に存在しその世界で他者と関わる場として、いわば「身体性」として捉えてみましょう。この時「からだ」とは人が自己を表現し、他者と交わる(コミュニケーション)ものであり、言い換えると人間の在り方そのものとも言えます。そしてここでは深入りしませんが、精神と肉体を殊更に分離して人間の実体をいずれか一方に求めることは、実際あまり意味のあることではありません。そして「清め」と呼ばれるものが時間的なものではないことを前提とすると、人間の死と復活を、死の直後と世の終わりの分離した二つの時間に求める必要もなくなります。

そうすると聖マリアの被昇天の教義は、私たち人間が与る救いについて語っていると理解されます。もちろん聖マリアはそれを完全で理想的な形で受けているのですが、それでも私たちが与る救いと別のものなのではありません。聖マリアを称える時、その恵みを自分にも与えてくださる方を称えています。

6, 結びに

実は聖マリアの被昇天の教義は「肉体」を伴うかどうかなど、その出来事の特異性を語ることよりも、むしろわたしたち人間が招かれている救いがどのようなものか語っていると言えそうです。聖マリアに起きた大きな出来事に驚く時、本質的には同じ恵みが自分にも与えられることに驚くのです…と、というようなことを月報「萌」2021年8月号に書いたのですが、あまり読む方も少ないようですし、信徒の方に長いとお叱りを受けましたし、この辺にします。

なお、週刊「こじか」の被昇天号の解説を書いたところ、表紙が「生神女就眠図」になっていますので、気になる方はご覧ください。

【信仰を生きる】

夏の思い出

池田 邦衣

夏といえば思い出すのは龍神教会です。龍神教会は龍神温泉で知られる和歌山県田辺市龍神村にあり、とても自然が豊かなところにある教会です。

私は18歳まで和歌山市で育ちました。当時、和歌山市には屋形町教会、今福教会、古屋教会とカトリックの教会が3つあり、小学生の頃、私は家族と一緒に今福教会に通っていました。今福教会は小さな教会で、子供の人数が多かった時代にもかかわらず、私が通っていた頃ですら日曜学校は1学年1～3人、低学年と高学年の2つのクラスしかありませんでした。それでも日曜学校は毎週あり、時にはシスターとマンツーマンという日もありました。日曜学校では歌を歌ったりみんなでゲームをしたり、朗読劇をしたりといった思い出もありますが、何より楽しかったのは夏休みにある龍神教会でのキャンプです。



毎年夏休みには和歌山県と大阪府の南部の教会の日曜学校に通っている子供たちが龍神教会に集まってキャンプ(合宿)がありました。小学校低学年、小学校高学年、中高生の3つに分けて行われ、子供の頃なのでよく覚えていないのですが、低学年で2泊3日、高学年と中高生は3泊4日で、子供だけでも50人くらい参加していた気がします。いろいろな教会・学年が混じった班が構成され、リーダーは神学生や大学生・高校生の

お兄さんお姉さん。普段とても少ない人数しかいない日曜学校に通っていた私にとってはそれだけで大興奮です。毎年参加していると同じ学年の子やリーダーとの再会があったり、また野外ミサや聖書の勉強の他、班対抗のゲーム、川遊び、キャンプファイヤー、自由時間にリーダーのお兄さんお姉さん達や友達とお喋りをしたり遊んだり。とにかくとても楽しかったです♪

その後、中学・高校は部活動で忙しく、教会に行くのはクリスマスとご復活くらいという時期もありましたが、なんやかんやあって20代半ばでまた教会に戻ってきました。子供の時に日曜学校でみっちりシスターにいろいろと叩き込まれたこと、龍神教会での楽しい思い出、それが今に繋がっているな、とつくづく思います。直接龍神教会のキャンプですることはできなかったけれど、自分が福山教会で10年間日曜学校のリーダーをしたこともあの頃お世話になった大学生のリーダーたちへの恩返し、いや次の世代への恩送りだったかな、と思っています。親でも学校の先生でもなく、自分と近い存在の大人、それは子供にとってとても貴重です。日曜学校のリーダーを辞めて何年も経ちますが、この先もどこかで日曜学校のリーダーの「恩送り」が続いていくことを願っています。

洗礼の恵み

藤岡 凜

「復活祭」という一番祝福された日に洗礼を受ける事が出来たのは、今日までの私の人生において最も幸せな事でした。私がカトリックの教えにふれたのは、福山暁の星高等学校に入学してすぐの時です。入学したての時にはすでに部活の話題がクラスの中で盛り上がっていて、私自身も興味がある部活は沢山あったのですが、最終的には「マリア・パン種クラブ」に入部を決めました。顧問のシスターは上品で美しく、とても聡明でかつ愛が溢れる姿に憧れて、何かに導かれた様に専属で入部しました。それから多くの奉仕活動を通して、中学校までには知る事のなかったカトリックの教え「互いに愛し、愛し合う事」「生きている事がすでに尊い事」など、直接心に響く事を沢山いただきました。私はシスターに「カトリックの教えをもっと学びたい。洗礼を受けたい。」とお伝えして、周りの多くの人に助けて頂きながら、洗礼の日まで約二年洗礼の準備のためのお勉強を行いました。信者となった今は、学んだ事をより日常で実践できる様に、毎週のみさのお話しを自分におとしこみながら聴いています。まだ分からない部分も多くありますが、教会の皆様や神父様に色々ご教授いただけると幸いです。



顧問のシスターは上品で美しく、とても聡明でかつ愛が溢れる姿に憧れて、何かに導かれた様に専属で入部しました。それから多くの奉仕活動を通して、中学校までには知る事のなかったカトリックの教え「互いに愛し、愛し合う事」「生きている事がすでに尊い事」など、直接心に響く事を沢山いただきました。私はシスターに「カトリックの教えをもっと学びたい。洗礼を受けたい。」とお伝えして、周りの多くの人に助けて頂きながら、洗礼の日まで約二年洗礼の準備のためのお勉強を行いました。信者となった今は、学んだ事をより日常で実践できる様に、毎週のみさのお話しを自分におとしこみながら聴いています。まだ分からない部分も多くありますが、教会の皆様や神父様に色々ご教授いただけると幸いです。

私はキリスト教の世界に出会って、自分の生命に自信を持つ事が少しずつできるようになりました。自己肯定感が低く、他人の評価に半ば怯える点に悩んでいた私に、神様は大きな手を広げてくださいました。「誰に何と言われ思われようと、生命を持ってこの世にいる事そのものが奇跡なのだ。」と、多くの方々の教えを通して、神様は私に伝えてくださいました。この教えは、いつか神様のもとへ帰る時まで、ずっと私を支え、背中を押してくれると信じています。

【福山教会の思い出】

齊藤 眞仁神父

福山教会は神学校卒業して最初の赴任教会でした。教会へ着くとすぐ自動車学校へ行くように言われ、東洋自動車学校へ行くことになりました。早速法規の勉強と実地が始まりました。三人の組で、一人は日本鋼管の下請け会社の派遣で一人はちょっとやくざな無免許運転で来る人でした。私は力が弱く、ハンドルをスムーズに回すことが出来ず、特別に車を止めて、前部を少し浮かし、ハンドルを左右へと回す練習をさせられました。当時はパワーハンドルではないトヨタのクラウンが練習車でした。初めて車に乗せられ、アクセルを踏んでの指示に従ったとき車が動き出し、当たり前なのにびっくりし、恐怖を感じたことを憶えています。

やがて仮免のテストが近づき、テストの問題の模擬用紙が配布されました。最初の試験があり、合格すると仮の免許証がもらえ外へ出て走ることが出来る。日本鋼管から来ている人は合格しなかった。

帰りに喫茶店に寄り、話しているうちに彼が文字を読めないことを知った。驚いた。今時、字が読めないことがあるとは思わなかったから。それから学校の帰りに喫茶店に彼をさそい仮免が取れるよう手伝うことにした。

学校が終わると模擬テスト用紙をもって喫茶店へ行き、問題を読んで検討した。二回目の試験も合格しなかった。彼は全く文字が読めないのではなかった。それで問題の文の終わりの特徴を教えた。三回目は大丈夫と思っていたのにだめだった。そしたら彼の姿が見えなくなり、とうとう諦めたようだと思わしく思った。

普通で当たり前だと思っていたことがそうではないことに行き当たり、考えさせられた。五十年前のことだけど今も忘れずにいます。

【街頭募金報告】

福祉部 野田 茂生



ロシア軍がウクライナに侵攻を始めた2月24日から早5ヶ月が経過しようとしています。しかしながら、この戦争が収束に向かう気配は今のところありません。侵攻の始まりの頃は衝撃をもって受け止められていたこのニュースも、昨今では元首相襲撃事件やコロナ陽性者の急拡大等国内のニュースに大衆の耳目は移り、当初ほどの関心を集めることにはなっていないように感じます。しかし、今この瞬間にも、幾多の人々の命が無為に奪われ、数限り無い人々が悲しみと窮乏に涙しているに違いありません。人間の屍が並ぶ凄惨な映像を流すの

を、メディアは意図的に避けているのですが、私たちは心の眼を開いてその有様を想像しなくてはならないでしょう。

というわけで、今回の街頭募金は、カリタス・ジャパンの要請に応じて「ウクライナ危機人道支援」に向けておこないました。いつもの福祉部に加え、終業式を終えた日曜学校の子どもたちも加わってくれたのが、心強い限りでした。9時のミサ終了後、おおむね正午まで、いつもの福山駅前に立ちました。募金額は3万円、さっそくカリタス・ジャパンに送金しました。



【帰天のお知らせ】

・マリア・テレジア岡崎多佳子(87歳)
謹んでお知らせします。どうぞ心を合わせてお祈りください

8・9月の行事予定

8月		9月	すべての命を守るための月間
5～6(土)	広島平和行事	4(日)	教会敬老会 日曜学校2学期始業式
7(日)	9時ミサ後平和記念行事	19(月)	教区の日
8(月)	福山空襲の日		
9(火)	長崎原爆の日		
14(日)	猪口神父様霊名のお祝い		
15(月)	聖母の被昇天 終戦記念日		

月報『萌』8月号をお届けします。8月は、広島・長崎の原爆、福山空襲、そして終戦(敗戦)の日と、平和について考えるべき月といえると思います。8月15日は終戦(敗戦)の日ですが、私たちカトリック信者にとっては聖母の被昇天の日でもあります。これは偶々の一致かもしれませんが、その意義・意味を併せて考えてみたいと思います。(SN)

月報委員会